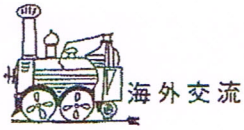

国境線が見えるか？

谷 本 親 伯*

Do you see a border ?

Key Words : International Cooperation, IAESTE, ISRM, English Conversation, Cosmopolitan

1．序

2001年1月19日から25日まで，南アフリカ国ダーバン市にて開催された第53回IAESTE (International Association for the Exchange of Students for Technical Experience) 国際総会に事務局長 (National Secretary) として出席した．70ヶ国より，約180名が参加した． 最近，再び脚光を浴びているインターンシップ国際版を推進するNGOの定例会議である．今回は，約7700名を国際的に研修生として相互交換することになった．研修生を引受ける企業あるいは大学・研究機関からの引受条件書をオファーといっているが，最大の引受国はドイツで1750件，その他の100件以上の国は，オーストリア(156)，ブラジル(442)，クロアチア(120)，チェコ(100)，フィンランド(193)，ガーナ(117)，ギリシャ(315)，ハンガリ(130)，オランダ(161)，ノルウェ(129)，ポーランド(174)，ロシア(160)，スロベニア(105)，スペイン(459)，スウェーデン(117)，スイス(251)，シリア(250)，トルコ(160)，英国(215)，米国(100)，ユーゴスラビア(282)である．ちなみに，我国は，85件である．

このようなインターンシップに対する考え方も，国々によりかなり異なったものがあるが，最近はIT関連やコンピュータを中心とする分野が特に注目され，社会の関心もその方面に大きく傾いている．そして，コンピュータ万能の如き印象を強く与えている．

写真1 IAESTEオファー交換会の一場面

たとえば，シミュレーション(いわゆるバーチャルリアリティ)で満足できる限界については，その分野の専門家でない限り理解することが困難である．国際会議に対し，情報ネットワークやその関連機器を利用して，直接顔を合わさなくとも十分な討議を行ったり研究の背景を理解することが何処まで可能であろうか．国境線を越えずして，海外交流が計れるであろうか．インターネットにより，十分な理解が本当に得られているのか．勿論，コンピュータ等の情報機器の進歩により，分野を限定すれば驚異的な便利さを享受しているのは動かし難い現実である．しかしながら，一方では，失っているものがあるのではないか．年令が理由とは思わないが，最近ITやコンピュータ時代の負の面を感ずることが多くなった．

この紙面を借りて，海外交流や日常の教育・研究活動を通じて感じていることをお伝えしたい．

* Chikaosa TANIMOTO
1943年12月15日生
昭和45年 京都大学大学院工学研究科資源工学専攻修士課程修了
現在，大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻，教授，国際岩の力学学会(ISRM)石造文化財保存国際委員会委員長，(社)日本国際学生技術研修協会(IAESTE Japan)常務理事・事務局長，工学博士，岩盤力学・トンネル工学・リモートセンシング

2．インターンシップ

コンピュータを通じて，規格の定まったものに関して人の思考を介在させなくとも極めて事務的(自動的)に情報を処理することは容易である．一方，「物つくり」の世界，特に物性が複雑で，使用環境が大きく異なる場合，すべてを既知とすることは不可能である．未知要因が減少している反面，別の未知要因が増加している．情報が容易に，また，短時間に行き交うことにより一人一人が思考する時間が極端に短かくなった．結局，浅い思考のまま前進したかのように錯覚している．

物理的な動き(現実)と架空の動き(仮想)を若干の時間をかけて理解するのにインターンシップが必要である．また，大きな社会(あるいは産業構造)の中で，個人がどのように機能しているか，新しい発想が何処から出てくるか，このような事を考える余裕をインターンシップに期待したい．1％のinspirationと99％のperspirationの世界が厳然とあるのである．情報を知っていても，知恵に至っていないことに気が付く．勿論，自分自身にも同じことを感じている．

痛みを共有し，五感を通して理解した「裸」の強さは一生奪われることがない．毎日学生に接していて，時間の経過と共に，少しづつたくましくなってゆくのが感じられるが，まだまだ過保護ではなかろうか．個人としての考え方や信念がなかなか伝わって来ず，国境線を越えた時に求められる「個としての強さ」に疑問を感じざるを得ない．その大きな理由として，語学力が足りないこと，そして教養が偏っていることを挙げたい．いずれも，学校教育の責任である．

3．ボランティア

神戸大震災の時に知り得た若者のボランティア活動は本物であった．周辺にこのような現実があることを知り，人生が豊かになった．しかしながら，別の機会に知り得る日本人のボランティア精神に疑問を感ずることも多い．ボランティアとしてやっているのだから，嫌になれば何時でも止められる，あるいは，自分としては最善を尽している，だから無責任な結果に終わっても許されると思っていることである．

国際紛争により多数の難民が生まれ，救済活動が行われる．ボランティアに依存する処が大きい．難民キャンプを訪れた日本人ボランティアがその悲惨さに涙し，難民を抱きしめる．その光景は美しく，ピュアな気持が伝ってくる．一方，感情的な行動が先行し，救済活動における貢献度は小さく，現場の混雑の中にあって，日本人ボランティアの活動は邪魔になることが多く遠慮願いたいとの第一線の声も出ている位である．現場に赴いても，現場を理解していないことになる．

数年前，フランクフルトからカイロへ行く機中で，20台後半の女性と隣り合わせた．彼女は，カイロからさらにスーダンのハルツームまで行く処であった．2時間余り，彼女は一声も発せず，沈み込んでいたが，食事後に話し始めた．ベルギー国籍で，友人と共に国連の難民救済に加わり医療活動中にゲリラ(反政府組織)の銃撃により，その友人を失った．そして，その遺体を本国に連れ戻し，両親の猛反対を押して，再度紛争地に赴くとのことであった．生命の危険を冒してまでどうして行くのか，と問うた処，一度やると決めたからには，自分なりに責任を果したいからという答であった．日本でのボランティア精神とは違うものを痛感した．

自分のささやかな経験として，この10年間スフィンクス修復のための学術調査が目的で幾度となくエジプトを訪問している．カイロのホテルでは，毎朝英字新聞が部屋まで届けられるが，中東紛争を見る視点が，日本とはかなり違ってきた．乱暴ではあるが，日本人の一般的印象は，パレスチナ側が頑であるようなニュアンスの報道が支配的であるが，近隣，時には当事国に居て，現地 及び 欧州のマスメディアの報道内容を総合すると，日本での視点は，偏っていると言わざるを得ない．双方の「妥協」がなければ，国際紛争は解決できないであろう．

4．語　学　力

昨年1月26日の朝日新聞に，「日本人，英語はやっぱりニガテみたい……」と題する記事が出た．日本人のTOEFLの平均点が501点でアジア21ヶ国中，下から第4番目の順位と報じていた．受験者の数や層などが大きく違い，順位はあくまで目安だが，最下位グループから抜け出すのは一朝一夕にはいかないようだと結んでいる．

TOEFLは，米国の公共機構ETSが開発，実施し，文章問題や聞き取りテストで英語で授業を受ける能

力を審査するものである．米国，カナダの多くの大学が留学生に受験を義務づけていて，4年制大学では550点を必要とするところが多い．

この記事と同様に，実は，出張先のバークレーにて見かけたSan Francisco Chronicle (2000年1月20日)紙上に，日本人の英語力は北朝鮮以下と評せられていた．多分，先述の朝日新聞も同じデータソースと思われる．これは，日本人の意志決定の在り方や当時の小渕首相が21世紀に向って日本の在るべき姿を指導的立場にある人々に問いかけたことに関連したものであった．日本の中で，好ましい日本人を演ずれば演ずるほど，国際社会と離れてゆくと述べ，日本の社会が大きく変貌しない限り，日本人は個としてひじょうに弱いと論評している．

英語の表現には，起承転結と明瞭さが必要である．日本語にしても同様であるが，一般には外国語での表現には限界があり，あいまいな表現ほど誤解が生じやすいと解釈する．英語は，表現の元になる考え方の訓練とも考えられ，表現が下手なのは，考え方がしっかりしていないと言えば過言か．

同じ分野や職業において，語学の上手な人がいる．微妙な感覚の問題であるかもしれないが，このような人は以外と異端視される気配を感じる．異端視する側には，外国語なんていい通訳を介すれば問題なし，あるいは，いずれコンピュータが直接通訳してくれるから熱心に勉強する必要がないと言い切る人も結構いる．また，学生の中にも，取り敢えず現地に行けば，英会話が短時間にマスターできると思う輩が相当数居る．語学に長じた人は，色々な形で地味な努力をした結果であることに思い至らない．明治17年(1884年)，日本を発ち，ドイツに4年留学した森鷗外の国際人としての活躍ぶりは現在にも通用する．卓越した語学力の裏付けがあった．

5．海外交流における「日本人的なもの」

平野幸仁著「日本人の西洋衝撃」(1983年，誠幸堂)の中に，面白い分析が見られる．著者は序章の中で，(1)「文化衝撃の度合いが他国人とくらべて強い」：すなわち，単一民族である上に島国に住んでいる日本人は，他の民族とくらべて異文化との直接的な接触体験が極端に欠けている．その結果，異文化との接触で思いもよらぬ傷を負うことがある．(2)「外国とのつき合い方がめまぐるしく変る」：経済大国になったとはいえ(現在日本はこのタイトルを失っている)，しょせんはアジアの片隅の小国．大国が風邪をひけば一緒になって風邪をひく構図は変らない．その右往左往する姿が，個人のレベルにまで染み込んでこないわけがない．(3)「異文化との接し方に5つの典型的タイプがある」：日本人が西洋と接するときに決ってとる心理と行動を分類すると5つのタイプに分けられる．どのタイプに自分が入るか分れば，西洋とのつき合い方が具体的に見えてくる．と述べている．

(3)について若干の補足が必要である．平野氏は，日本人のもっともおちいりやすいパターンとして，異国文化を自国文化の観点から盲目的に批判し，拒否することであり，裏を返せば却って文化衝撃に大へん弱いために，自分の殻を閉ざしてしまうことを挙げている．次に，異国文化の観点から自国文化を批判し，拒否するタイプを指摘している．両者とも決して望ましい型でないことは説明を要しない．理想的な型は，異文化の異質性を積極的に評価し，同時に自国の文化をもより深く理解し，評価しようとする態度を持つことになる．海外旅行が一般化した現在でも，実際には，この型に最初からぴったりと該当する人はきわめて稀である．文化衝撃すら感じない人の方が多いのではないか．単なる旅行者としては知ることの少ない部分であり，コンピュータを介したおつき合いでは決して感じることがない．

平野氏の分析を引用すること，あと少し我慢願いたい．同著で，異文化に接すると自分と日本が再発見でき，外国で評価される人の条件が分る可能性を示唆している．(1986年ケニアに4ヶ月滞在した際，平野氏の著書に接し，感ずる所が多かった．)氏は，「言葉だけでは信頼をかち得ることができないのは洋の東西を問わない．そこには人格が必要となってくる．外国人の間で伍して行くには何よりも大事なことだ．」と述べていて，本文の著者自身がカリフォルニア大学滞在中(1982～1984年)に痛感したことを見事に表現している．

ナウマン象で知られる地質学者エトムント・ナウマンは，明治政府に招かれ，10年間にわたって地質調査の技術指導に当った．このナウマンが明治19年3月6日，ドレスデンの地学協会にて日本に関する講演を行った．事実に反する意外な中傷に満ちた講演を聴いた森鷗外は，反論したくとも式場演説であるためそれが許されず悩みに悩んだと「独逸日記」に述べている．さらに，講演会の日の夕食会にて，

ナウマンは重ねて，対面に鷗外が着席している状況下でたちの悪い日本批評を行った．鷗外はただちに地学協会会長の許可を得て，端正なドイツ語で反論した．列席のドイツ人たちは口々にほめた．ナウマンの不当な偏見を見事に紳士的態度で指摘したのである．鷗外とナウマンの確執はこれで終らず，ミュンヘンにおいて，新聞紙上での「鷗外・ナウマン論争」に発展する．ナウマンの執ような中傷に立ち向う鷗外の反論は一読に価する．鷗外の教養の広さ深さ，そして彼我の文明・文化に対する理解の深さに支えられた人格の強さは今なお鏡となるであろう．

6．代理出席

「日本の常識は世界の非常識」とも言える事例を自分の体験に基いて紹介してみたい．1970年に，OECDにより，トンネル技術情報を国際的に交換する必要性を謳う会議がワシントン市にて開催され，これを受けて，1975年4月に，ミュンヘン市にて第1回国際トンネル協会(ITA)総会が開かれた．まだ，トンネル技術者として若年の筆者に，ゼネコン代表のお鉢が回ってきたのは実に幸運であった．建設省・鉄道・道路・会計監査・ゼネコンの五者を代表する団員と団長からなる6名の小規模な代表団であったが，総会およびそれに続く理事会に対しても機動的な対応がとれた忘れ難い海外渡航であった．そして，その7年後，遊学先のバークレーにて，トンネルを専門とするノルウェーからの教授と1年間同室者として過した．貴重な外国生活を演出してくれた友人でもある．共に慣れない地で家族と共に生活し始めた頃，君のような日本人は始めてだと言われた．Yes，Noをはっきり言うので，理解し易いとのこと．日本では歓迎されない事が，アメリカでは受け容れられたと嬉しく受けとめた．そして重ねて，ITAの理事に日本人が選ばれているが，毎年出席者が変わる．理事としてS氏(某公団副総裁)の名前はよく聞かされるが，彼の任期中に一度も会ったことがない，と聞かされた．よくある，日本的代理出席で事足れりとするケースである．大きな式典で，国会議員や市長などが公務の都合により急拠出席できず，秘書が代理出席し，挨拶文を代読するのを延々と強いられた経験を持つ人は少なくない．形式だけの式典で終わる場合は代理出席も許されるかもしれないが，国際社会では，本人が出席できなければ欠席である．

さらに，私的な経験談にて申し訳ないが，10年ばかり前，自分の所属する国際○○学会のVice-Presidentに就かないかとその時のPresidentに打診されたことがある．極めて名誉なことであるが，自分にはまだ早すぎ，日本国内でも受け容れられない，と断った．これに対し，日本人の多くは副総裁職を名誉と考えているが決して名誉のための地位ではなく，実務的なハードなもので，直接コミニュケーションが図れない人がなるべきものではないと強く反論された．然るべき学閥で，然るべき年令で，日本の学会の要職にある人が着任すべきというのが日本国内の常識で，その職に伴う責務は，若い人が肩代わりするよくあるパターンである．小生への打診が何処からか漏れ，不当なバッシングを受ける結果となった．

それから，大学に所属する立場から数々の技術委員会に委員として招かれ，年に何回かの会議に出席することがある．約半分の会議は，本音は不要で出席した事実だけが望まれている．一種の社会的職務かもしれないが，学術経験者として承認だけが求められる．馬鹿馬鹿しいと感じていても，出席しないと，同業者組合に入れてもらえないのが現状である．本音を発して，それで疎まれるのであれば，それもよし．人生限られた時間であるので本音だけで生きたいのが本音である．

7．結び（？）

最初に南アフリカでのIAESTEの会議に触れた．著者にとって初めての国でもあり，映画「Cry Freedom」(1988)で強い印象を抱いていたことも重なり，その歴史に興味を持った．南アフリカ共和国からボツワナ，ナミビア，ジンバブエ一帯に住む人々は，もともとブッシュマンやホッテントットで，アフリカ最古の民族といわれ，皮膚は黄色．先史時代の岩窟画を多数残している．15世紀頃，北方からバントゥ系のアフリカ人が南下して中部や東部のサバンナや砂漠地帯に追われたとのこと．

そして，ほぼ同時期の1488年ポルトガル人バーソロミュ・ディアスが喜望峰を発見した．17世紀の半ば，オランダ人がケープタウンに居留地を作り，オランダからの移民が入植地を開拓，拡大していった．17世紀末にフランス人(ユグノー)が多数移住し，原住民と衝突．18世紀末から19世紀初めにイギリスが占領し，その後オランダ・英・仏の3国間の激しい占拠が繰り返された．イギリスによる本格的支配は

1920年以降である．その歴史で，19世紀前半の，奴隷制解放に反対するボーア人（オランダ系移民）が原住民と戦いながら北方へ移動し，1938年ナタールで発生したズルー族との血の戦いは特筆される．

筆者は滞在中，ナタール地方でズルーの伝統を伝えるShakalandを訪れる機会があった．そこに至る道中にて，約3時間，南アフリカの歴史とともにズルーとボーアの激斗に至る経緯を聞かされたが，要するに，欧州3国間の国益至上主義に発した汚ないだまし合いの繰り返しに原住民が巻き込まれ，武力の差に泣いたのである．今日，あちこちで発生している国際紛争に眼をやれば，この図式は過去のもので終わってはいない．当事者は，いささか変化しても現紛争の実体は変っていない．色々な正義が宣伝されるだけである．ひじょうに困難ではあるが，「賢さ」と「妥協」が求められる．

南アフリカからアパルトヘイトが公的に無くなったのも，わずか7年前である．ダーバン滞在中には意識しなかったこの問題も，ヨハネスブルグで感ずることがあった．過去，激しい虐待を受けた者の冷たい眼差と決して笑うことのない表情である．米国モニュメントバレーで，先住インディアンに感じたものを思い出した．中国・鶴壁での炭鉱にもあった．いつ越えられる国境になるであろうか．

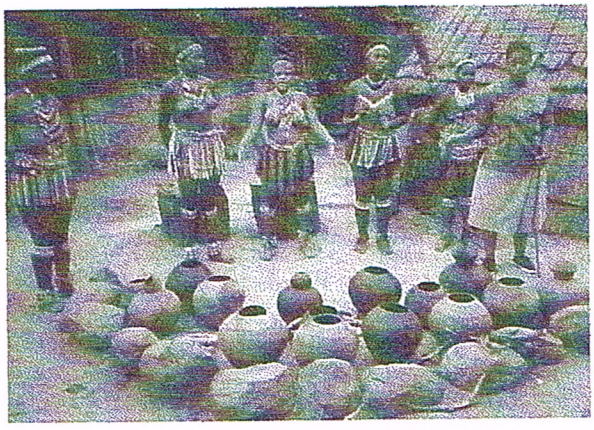

写真 2　ズルー族の未婚の女性は体型に関係なく自分の身体を誇示するのが伝統．ビーズの飾りが美しい．色にも意味がある．

若者よ，国境を見すえ，そして国境を越えなさい．